日本医史学雑誌　第63巻第1号（2017）　103–112

青山胤通家関連文書（4）

青山文書の会

［18］北里柴三郎の書簡

北里柴三郎は明治・大正期の細菌学者．嘉永5年肥後（熊本）生まれ．明治16年東大医学部卒業．18年より25年ドイツ留学．この時破傷風菌・ジフテリアの血清療法を開発．大日本私立衛生会付属伝染病研究所所長・北里研究所所長・慶応大学医学部長歴任．昭和6年6月13日没．享年80．（1852–1931）

明治27年香港にてペスト流行により，6月青山胤通・宮本叔等は政府の命令で調査・研究の為出張．この時北里柴三郎も研究の為香港に赴く．

1　明治27年8月3日　（78号）
（封筒表）　香港ニテ　青山胤通様　親展
（封筒裏）　〆　東京　北里柴三郎
拝呈，貴兄ニモ其後漸々御快復ニテ既ニ御上陸之御由大慶至極ニ奉賀候，乍此上充分之御保養アリテ御帰朝之期ヲ奉待候，貴兄等之御病気ニ付てハ日本ニテハ到ル処貴賤之別ナク非常ノ驚愕ヲ来タシ，上下挙テ一日モ早ク快癒ヲ希望シタル段筆紙ニ尽シ難キ有様ニ候，小生モ御地出発後海上風雨ニ逢ヒ，例ノ船弱ニテ困難仕候末，去ル三十日午後九時無事ニ着京仕候，早速貴家ヲ訪ヒ御令閨初メ皆様え拝眉之上委細御地之模様御咄シ申上候処，其レニテ略ホ御安神被成候，且又御令嬢モ御健全ニ候間御休神被下度候，石神モ本日貴地出発之由是亦大慶ニ奉存候，弥以日清戦ヲ開キ候処今日迄ハ我邦之大勝利ニテ軍艦ヲ捕獲シ，牙山ノ支那兵ヲ攻落スル等実ニ愉快之至ニ御座候，貴兄御帰朝之比ハ天津ヨリ北京ニ攻メ入リ城下之盟ヲ為ス迄ニ相運ヒ可申，今ヨリ相楽ミ居候，右ニ付森・賀古ノ両氏モ近日支那え出張可致候，委細ハ新聞紙上ニテ御承知之事ト奉存候，御地ラウワン氏初メ其他ノ人々，且又宮本・高木ノ両氏えモ暮（ママ）々宜敷御伝声被下度候
八月三日　北里柴三郎
青山賢台　侍史

［19］小池正直（まさなお）の書簡

小池正直は明治期の軍医．安政元年鶴岡藩医家に生まれる．明治14年東大医学部卒業．陸軍省入省．日清戦争時兵站軍医部長，日露戦争時大本営野戦衛生長官兼満州軍兵站総軍軍医部長を歴任．軍医総監．男爵．大正2年12月没．享年60．（1854–1913）

1　明治37年12月26日　（86号）
（封筒表）国内帝国医科大学　青山教授殿　親展
（封筒裏）　野戦衛生長官　小池正直
拝啓，陳は今回貴官以下陸軍衛生勤務幇助之義，許可相成候処東京予備病院ニ於テハ本省よりノ通報ニ基キ夫々部署ヲ定メ相待居候趣ニ付，直接平井病院長ト御交渉之上御都合次第御出務相成候様致度，本文之旨貴官より出願者一同へ御通知相煩候，頓首
十二月廿六日　小池正直
青山教授殿
追て助手以下終日勤務ニ服シ候者ニハ出務之日より手当ヲ被給し事ニ取計置申候，右申添候也

（注）日露戦争時軍医不足の為，大学・専門学校の医学研究者が各地の予備病院え応援に出向いた．

［20］児嶋惟謙（これかた）の書簡

児嶋惟謙は明治期の司法官．天保8年伊予国宇和島に生まれる，坂本龍馬とも交わり討幕運動，戊辰戦争に参加．司法省に出仕し各地裁判所長歴

任．大審院長の時に判決を下した滋賀県大津で起きたロシア皇太子負傷「大津事件」（24年）は有名．明治41年没．享年72．（1837–1908）

1　明治33年8月1日　（82号）
（封筒表）本郷弓町二丁目　青山胤通殿
（封筒裏）緘　明治三十三年八月一日
荏原郡大井村　児嶋惟謙
（消印　武蔵東京・卅三年八月一日・□便）
拝啓，愚息正一郎[1]今回の戦死に就ては早速御鄭重なる御弔詞を賜はり感銘の至に不堪候，弱冠志望未だならず空しく異郷の土と化し候事，老生ニ於て実ニ忍び難きもの有之候得共，聊か奉公の責を尽したるものと存候得ば又た大に慰る処無きにあらずと存居候
先は御懇情御礼まで，如斯ニ御坐候，草々敬具
明治三十三年八月一日　児嶋惟謙
青山胤通殿

（1）正一郎　児嶋惟謙の長男．明治8年神田錦町に生まれる．32年外交官補．33年7月3日北京公使館勤務中義和団の乱に遭遇し銃弾に倒れる．享年26．（1875–1900）

2　明治　年12月4日　（81号）
（封筒表）　本郷弓町　青山胤通殿
犬添　大井村　児島惟謙
（封筒裏）　緘
御清穆奉賀候，陳は御厄介ニ相成候病人も其後漸々快方之模様ニ見受申候へ共，今一度御診察之上最早当地ニアルノ必用も無之候ハ、帰郷為致度，乍御迷惑両三日中御都合宜布節西園寺迄御出診願度，其時日御示シ被下候ハ、幸甚，御約束之番犬差上申候，名（フク）ト申候也
十二月四日　惟謙
青山様

［21］後藤新平の書簡

後藤新平は明治・大正期の政治家．安政4年陸中国（岩手県）水沢藩士の子として生まれる．須賀川医学校卒．愛知県病院長兼愛知県医学校長となる．長与専斎に認められ内務省衛生局に勤務．31年台湾総督府民政局長．39年満鉄の初代総裁．逓信相・内務相・外相などを歴任．大正9年東京市長．12年内務相となり帝都復興院総裁をかねて関東大震災後の東京の復興に尽力した．伯爵．昭和4年4月13日没．享年73．（1857–1929）

1　大正2年12月20日　（79号）
（封筒表）青山医学博士大人　　添書　御親展
（封筒裏）封　　後藤新平　石川武雄持参
旧友石川洵の長男武雄[1]今回医科大学卒業候付，貴博士大人の助手たらんことを希ひ小生ニ助力援引をもとめ来候処，近頃志願者群集の趣ニ付御迷惑とは拝察致候へ共，研学御指導之栄を得候へは無此上幸福ニ御坐候，何れ近日拝話之節委細御願可致候へとも取急き候ゆへ添書差出候，御引見之上御示教を仰き度，草々不尽
十二月廿日　新平
青山博士大人　侍曹

（1）武雄　石川武雄．大正二年東京帝大医科大学卒業．

［22］近衛篤麿（このえあつまろ）の書簡

近衛篤麿は明治期の貴族政治家．文久3年公家近衛忠房の長男として生まれる．学習院長・貴族院議長．東亜同文会，上海同文書院を設立しアジア主義の思想を主唱した．公爵．明治37年1月2日没．享年42．（1863–1904）　長男は近衛文麿．

1　明治　年11月30日　（80号）
（封筒表）本郷弓町　青山胤通殿　親展
（切手3銭）
（封筒裏）封　貴族院官舎　近衛篤麿
拝啓，近来健康何となくすくれす候ニ付一応十分之御診断を仰度存候，可成ハ尊邸ニ於て相願度存候ニ付，御在宅之時刻を承置度候，小生咽喉之治療を受け，昨今平臥罷在候間，尚ほ一両日ハ参上仕兼候得共あらかしめ御都合承置度存候，草々
十一月三十日　近衛篤麿
青山胤通殿

過日来貴族院官舎ニ住居仕居候間御返事ハ官舎之方ニ願候也

[23] 小林好愛の書簡

小林好愛は青山胤通の妻孝子（長女）の父親．大蔵省預金局長を勤める．

1　明治27年9月7日　（114号）
（封筒表）箱根塔ノ沢福住方　青山胤通様　親展
（消印　相模湯本・廿七年九月八日ハ便）
（消印　相模宮ノ下・廿七年九月八日ロ便）
（封筒裏）　東京湯島六丁目拾番地　小林好愛
拝啓，御出立後愈御快気御保養之由喜悦此事ニ御坐候，当地別て無異状只日々雨天困入候，芳嬢[1]ハ如何健康ニ候哉，未タ帰京ヲ促シ不申哉，老生も少々保養致し度候間，明後九日其地へ向ケ出立可致候間，着之上緩々寛話可相画候，若芳嬢かへりたがり候ても相待くれ候様致し度，右御案内旁御左右御尋ね候まて，早々拝具
九月七日　夜　小林好愛
胤通様

（1）芳嬢　青山胤通の長女 芳．この時4歳．

2　大正2年8月12日　（115号）
（封筒表）信州軽井沢　青山胤通様　親展
（消印　2・8・15）（切手3銭）
（封筒裏）〆　東京本郷弓町四丁目
青山方ニテ　小林好愛
拝啓，御出発後御留守宅無事御休神是祈候，扨地積新築地土蔵敷地之基礎工事ニ付地所掘下ケニ着手之処，克郎氏境界寄之方凡拾尺程之所ニ瓶壱個埋没シアリシニ，土工等不心付打砕キタルニ，人骨ラシキモノ相顕候，尤頭蓋骨等具備シタルモノニは無之候得共，人骨ニて相違無之様被認候間，小生警察署へ参リ協議候処早速掛リ警部相越実検セシニ人骨ニ相違ナキ由，右ハ慣例ニヨレバ区役所ニ引渡埋葬可致筈ニ付，警察署ト区役所協議之上何分之指図有之筈ニ御座候，然ルニ職人共ニ於テハ如斯事アル時ハ関係之者共怪我等致スコトアル抔迷信俗説紛々タル状勢ニ付，基礎工事浄メ之為メ極簡易ナル浄メ祓ヒノ形式ヲ執行セラレ度トノ職方希望ニ有之，幸ひ本日監督技師山口氏も出張被致候所，望ヲ容レラレル方心様も安マリ可然トノ意向ニ付，来ル十四日近所之桜木神社神官ニ依頼シ，ホンノ形式丈ケ執行致し候方可然被存候間，此段御報道旁申上候，御異議無之候ハヽ別ニ御報ニ不及候，右申上度，早々拝具
八月十二日　小林好愛
青山胤通様

[24] 小村寿太郎の書簡

小村寿太郎は明治期の外交官．安政2年日向国飫肥藩（宮崎県）下級藩士家に生まれる．明治8年文部省貸費留学第1回生としてハーバード大学法律学科に学ぶ．帰国後司法省から外務省に転じ，陸奥宗光の知遇を得，弁理公使・特命全権公使・2度の外務大臣等を務める．日露戦争講和全権としてポーツマス条約調印に尽瘁する．侯爵．44年11月26日没．享年57．（1855–1911）

1　明治38年10月17日　（85号）
（封筒表）　青山博士殿
（封筒裏）緘　小村寿太郎
拝啓，時下益御清穆奉賀候，陳は小生義米国ニ於テ突然病気ニ罹リ急速帰朝モ如何ト苦慮致居候処，幸ニ船中無事昨日[1]安着致候，因テ今朝不取敢高橋国手之診察相受候処，唯今之所にてハ別ニ異状無之モ一応貴台ノ御診察相願候方可然旨，同国手モ被申呉候ニ付テハ甚タ恐縮ニ候得共御都合宜敷節何時にても御来臨相願度，右御承諾被下候ハヾ御来診之日時其前電話ニテ御通知被下度，此段御依頼迄得貴意候，敬具
十月十七日　小村寿太郎
青山博士殿

（1）昨日　小村寿太郎は明治38年9月5日米国ポーツマスにてロシアとの講和条約を締結後，10月16日横浜に帰国した．

2　明治（38）年11月6日　（126号）
（封筒表）　青山胤通殿　紙包壱個添

（封筒裏）角封印　　小村寿太郎　角封印
拝啓，陳は此程米国ヨリ持帰リ候ハヾナ・シガー少々ニハ候得共，茲ニ差上候間御試煙被下度，拝具

十一月六日　　小村寿太郎
青山博士殿

［25］近藤次繁（つぎしげ）の書簡

近藤次繁は明治・大正期の外科医．慶応元年信濃国松本藩士鶴見家次男として生まれる．明治23年帝大医科大学卒業．医師近藤旦平の養子となり欧州留学．31年より大正4年迄東京帝大医科大学外科教授．昭和19年没．享年80．（1865–1944）

1　明治37年9月6日　　（127号）
（封筒表）　東京本郷弓町　　青山胤通殿
（封筒裏）〆　九月六日　於廣島　　近藤次繁
朶雲披見，拙生衰躯追日快復昨日宮島見物ニ行き約十町許リノ途を歩行シ得る迄ニ相なり申候，乍憚御降慮可被下候，偖又拙生快復ノ上ハ再度渡清ノ意なきやとの事ニ候ガ，予ガ見し戦地ノ衛生部ノ治療機関甚ダ不完全ニシテ今ノ侭ニてハ心を安シて開腹（戦時創ニ開腹ノ可否論ハ別トシテ）穿顱等ノ術を施コス事出来ズ，僅カニ繃帯交換，化膿部ノ切開，留丸除去位ノ施術ヲ行なひ得るニ過きさる有様ニ有之，既ニ前便略申上候通リ負傷者ノ集合点なる兵站病院ニシテ少なくも当廣島予備病院位ノ設備ト医員有之候ハヾ，先ヅ従軍外国医官ニ対シテモ左迄恥ツカシキ事もなきが，現下ノ青泥窪ニ於ケル状ハメチヤメチヤニ候，南阿ノ役，英医ノ側ハ勿論ナリシナランガ独逸より出張セる医もX光線器械ヲ戦地ニ持ち行き同器械ノ用ゆへきを示シ候程ニ準備十分ナリシガ，青泥窪兵站病院ニありてハ消毒竈ノ内地より来るなく，幸ニも敵ノ残遺セる消毒竈ノあるありて僅カニ病衣其他ノ消毒を行なひ得ると云ふニ至リてハ誰レカ準備ノ不十分ニ驚カザラン，野戦病院ノ現状ハ予ノ見る所に以上ヲ望ミ難きかと思はる，但シ此病院ニて鶴田ガ三回開腹術を行なひしと云ふ事を聞て，只其大胆ニ驚けり（三名共死ス），予は既ニ野戦病院ノ事務ヲ実見シ，之レガ作業ニ従事シ同病院ガ少ナクモ清国遼東ノ野ニ於てハ予輩ノ力ヲ要スル場所ニあらさるを知りぬ，設備十分ならはと見シ兵站病院亦又右ノ如シ，前期生看護人あらは事足るへき現時ノ状ニありてハ予ノ為すへき地はあらす，先キニ小池氏[1]ニ書を送りて兵站病院設備ノ誠ニ不十分なるを告げ，同病院ニシテ十分ノ設備あり医師ラシキ医ノ治療ヲ司とるあらは傷者ノ幸，経費ノ点ニ於テモ利あるへきを告けたり，氏ハ予ノ注意を如何ニ見シヤ，（之レハ極メテ秘密なる故其御積ニ願ヒタキ事なれと，当地在順天堂一派一団をなして十分ノ設備ヲ具へ戦地兵站病院，特ニ青泥窪ニ渡航セんとノ意あり，之レニ就きてハ予ノ意見も与ツテ動機トナリシ模様，成否ハ兎ニ角右ノ如キ挙ハ目下ノ必需ト考ヘラル），予ハ思フ，在内地ノ軍医ヲ悉ク戦地ニ送リテ各病院ノ整理ヲ行ナヒ，在内ノ予備病院ニ於ケル治療的ノ事業ハ凡テチフィールノ医ニ托スへき事，軍医現時ノ配附不足ノ点より考へて必然ノ勢なりと，猶現時ノ如ク傷病者多数ノ際ニありてハ諸所ノ予備病院ハ益其設備を大ニすへき必要あり，従て之レニ要する医ノ多大なるへき論なし，之レニ於て予ハ閣下ニ望む，直接陸軍大臣若シクハ桂伯又ハ山縣（ママ）候ニ談シ医師欠乏ノ傷病者ニ及ボす惨状を救ふが為メ閣下支配ノ医科大学ノ余力ヲ貸すへき事，之レガ為メニ和泉橋焼跡ヲバラック[2]建設ノ地ニ供すへき事ヲ告ゲ永久的使用ニ堪ユヘキバラッ（ク）建設ニ要スル資金ノ供給ヲ閣下ノ霊腕ニて御運動あらん事を，日清ノ役，彼レ後藤[3]ハ児玉[4]ヲ威逼シて似島[5]ノ消毒所を大成セリ，事ハ異なれとも小ハ不幸なる傷病者ニ福ヲ与へ，大ハ国家を利するハ相同ジ，此クシテ大学ハ好個ノ戦勝記念物ヲ獲，日本ノ疾病者ハ長ク其幸ヲ享ケン，和泉橋明地ノ始末も亦此ニ解決シ得ラレンカ，呈嘱之，誠惶謹言

九月六日　　近藤次繁
青山博士殿

（1）小池　小池正直．大本営野戦衛生長官兼満州軍兵站総軍軍医部長．
（2）バラック　仮兵舎の事．

（3）後藤　後藤新平の事．明治28年陸軍検疫部事務長官．
（4）児玉　児玉源太郎の事．明治28年大本営陸軍参謀兼臨時陸軍検疫部長．
（5）似島（にのしま）　広島湾の南約3 kmに位置する島．明治28年より昭和20年8月迄陸軍の検疫所が置かれ，廣島原爆被爆の時臨時野戦病院となった．

2　明治38年4月10日　（84号）
（封筒表）大日本東京本郷弓町　青山胤通様
（封筒裏）明治三十八年四月十日
在清国武昌　近藤次繁
粛啓，七日朝漢口到着，領事館ニ行キタルニ張氏ノ方ニて十日来諸準備致シ待ち居との事故，即日対岸ノ武昌府ニ行キ用意セられたる寓居ニ落附キ，八日午前十一時診察候処，先ヅ舌癌ニてハ無之，ロイコプラキー[1]ニ有之，梅毒性と云ふ事ハ先頃仏医申セシとかニて総督[2]ヨリも尋ねありたれと他ニ梅毒と思はしき処も無之，非梅性ノものと考候，どーニカ治し可申とは存候得共，旬日ニてハ迚も行届き難ニ付き，兼ねて御相談之通り杉学士を留メ置可申考ニ候，総督 齢六十九，一観相ノ者，嘗テ張氏七十ニシテ死セント判セシトカニて同氏非常ニ心配シ居リ候趣，又先頃此地ノ巡撫タリシ端方[3]と云ふ人，此市ノ東西を隔スル蛇山と申ス丘ヲ切リ崩シ新ニ路ヲ開ク往来ヲ便ニセシガ，後一医，総督ノ病ヲ診シテ蛇山ヲ損セシ祟リナリト云ヒシヲ以テ折角切リ下ゲタル新道を復又旧形ニ復セシメシト申ス，迷信驚クベキモノ有之候，又氏ハ嗜烟・好酒・好色家ノ由ニて，三十才位ノ妾モ居リ候，此度喫烟ヲ厳禁セシメ酒ヲ節セシメシニ，一昨日来大ニ其戒ヲ守リ居候，其他此地ニ医ヲ聘すると申す事ニつきても昨日懇々日本新医学ノ依るへき事を述へ候ガ医員招聘ノ事も更ラニ直接ニ勧メ置候，大ニ耳を傾ケ居候模様ニ候，夫ニツケテモ人物精選ノ必要有之ニツキ今後右ニツキ何等ノ話有之バ御周旋可被下候，拙者ハ尚一週許リ滞在帰東可致候，尚総長[4]初メ各位ニ皆宜敷御致声願上候
青山学長殿　近藤

（1）ロイコプラキー　白斑症．
（2）総督　明治38年清国の両江総督周馥（しゅうふく）．大正10年没．（1837–1921）
（3）端方（たんほう）　明治41年清国の両江総督兼南洋大臣を勤める．明治44年没．（1861–1911）
（4）総長　この時東京帝大総長は山川健次郎．
（注）明治41年青山胤通は外務大臣小村寿太郎の依頼により清国両江総督兼南洋大臣端方病気診察の為南京に赴く．

3　明治39年（4）月　日　（83号）
（封筒表）HOTEL ROSE WIESBADEN
Herrn Prof. Dr. Aoyama　Tokio Japan
東京本郷弓町　青山胤通殿
（消印　39・4）
（封筒裏）　（消印　39・4　JAPAN）
愈御機嫌能公務御鞅掌奉賀候，偖拙者去ル十一日伯林ヲ去リ南独二三ノ病院ヲ見物シ昨日当地ニ参リ候，之レヨリBonnヲ過ギ巴里ニ行キ倫敦ヲ見テ四月六日欧州ヲ離レ可申筈ニ相定メ置候，Lissaponノ祭リ騒ノ会合ハ拙生少シモ興味無之，只四月下旬ノ独乙外科学会丈ハ聞クモヨシトハ存シ候得共，実ハ欧州ノ所謂大家ノ天狗連ニ対シ小サクナツテ参会スルモ馬鹿馬鹿シク米国ノ見物モ貴説ニ従ヒ余リ暑ナラザル中ニ致シ度，夫レ此レニテ学会見物廃止帰朝トスニ決シ候次第ニ候，本邦ニテハ例ノ万国トカ国際トカノ医学会ヲ引受クルニ付テ諸名家賛否議論アリタル由ニテ，一二ノ名論ヲ閲読仕リタル処，帰スル処大同小異ニ有之，賛否両者ノ顔ブレヲ見テ其人ノ平生ヲ知リ一決シ度候，当地ノ在留ノ者共ハ誰レ彼レニ論ナク拙生ト同意見，即ハチ尚早論ニ候，願クハ西比利亜鉄道[1]ヲ完全ナラシメ満韓鉄道ヲ速成完美（ママ）ナラシメ日欧間ヲ極メテ縮少ナラシメヨ，然ラズンバ他ノ点ハ兎モ角時日実費ノ点ニ於テ当地大家ヲ招致スルコト難カラン，予近頃二三ノ大家ニ問フニ若シ日本ニ医学会ヲ催フサハ来会ニ意アルヤ否ヲ以テス，彼レ等異口同音ニ最初予ガ言ヒ出ノ突飛ナルニ驚ロケルモノヽ如シ（遺憾ナガラ誠ニ如此），暫ラクシテ笑ヲ含ミ乍残念現職中ニハ為シ得ザラン，□歳ノUrlanlハ得ルニ由ナシト云フ，

此一事以テ数年ノ後ナラズバ医会開催ノ望ナキヲ証シ候，況ンヤ魯国ノ現状当分□後経営ニ苦シンデ東西ノ事自カラ等閑ニ附スベキハ（D.h. 西比利亜鉄道ノ改良抔）数ノ見易キ処ニ候，然ルニ況哉報アリ，日本政府魯ニ談ジテ西比利亜鉄道大改良ヲ促ガスノ意アリト，果シテ真乎，而シテ如何ナル約束ニテ魯ヲ承諾セシメントスルヤ，巨細ハ不詳ナレドモ如何ニモ我日本交運ノ為メニ最大必要ノ事項ニテ我当局又人アリト私ニ感シ居リ候，況ンヤ魯トアラスカ間海底鉄道敷設ノ議将ニ成ラントスルニ於テヲヤ，欧州ノ事物見ニツケ聞ニツケドーシテモ我国ヨリ進ミ居リ候，但シ学問ノ事ハ今少シト存候，夫モ之レモ金力不足ノ為ニ候，当Rose-Hotelト帝国ホテルト比シテモ分明ニ候

Wiesbadenニテ　　近藤次繁

青山老台

（封筒，便箋共にローズ・ホテル名入りを使用）

（1）西比利亜鉄道　シベリア鉄道．明治37年に一応完成したが，モスクワよりウラジオストック迄の現在のルートの完成は大正5年（1916）である．

［26］西園寺公望（さいおんじきんもち）の書簡

西園寺公望は明治・大正・昭和の貴族政治家．嘉永2年公家徳大寺公純（きんいと）の次男として生まれ，西園寺家を継ぐ．戊辰戦争の時は山陰道鎮撫総督・会津征討越後口総督府大参謀として従軍．明治3年渡仏．文部・外務・総理大臣・枢密院議長・政友会総裁等歴任．元老として天皇の政治顧問を勤める．又明治天皇侍従長・内大臣を勤めた．徳大寺実則（さねのり）は実兄．公爵．昭和15年11月没．享年92．（1849–1940）

1　明治　年5月4日　　（129号）

（封筒表）（欠）市神田区裏猿楽町六[1]

青山胤通殿　　（切手3銭）

（封筒裏）〆　神田区南甲賀町五　西園寺公望

拝啓，其後ハ御無音之処御清適大賀至ニ存候，陳ハ園中躑躅開花候ニ付麁酒呈度来七日午后四時頃より駿河台宅え御来車願候，於御許諾大幸至ニ候，右申試度，草々頓首

五月四日　　公望

青山様　梧右

諾否御一報ヲ煩シ度候，電話にて宜布候，本局二千四百八拾番也

（1）青山胤通は明治34年に神田区裏猿楽町6より本郷区弓町へ住居を移す．

2　明治35年4月7日　　（128号）

（封筒表）東京裏猿楽町六番地[1]　青山胤通殿

（封筒裏）〆　相州大磯町　西園寺公望

（消印　武蔵東京卅五年四月七日ヲ便）

拝啓，御多忙中甚申兼候得共，小生実弟住友吉左衛門[2]義，近頃肝臓ニ申分有之候由にて其内参堂可仕候間何卒御一診被下度，右御願申に於御許諾ハ大幸至ニ候，小生ハ引続快然罷在候，乍憚御放念願上候，右要用而已，草々頓首

四月七日　　公望

青山国手　梧右

（1）裏猿楽町　封筒表の消印の部分に付箋あり．内容は不分明なるも転送依頼書か．青山胤通は35年には本郷区弓町へ住居を移している．

（2）住友吉左衛門　明治・大正期の実業家．元治元年12月21日公家徳大寺公純（きんいと）の6男として生まれる．住友家の養嗣子となり住友吉左衛門，又は友純（ともいと）と称す．以後銅鉱山業より事業を発展させ銀行・化学・林業等住友財閥を創り上げる．男爵．大正15年3月2日没．享年62．（1865–1926）

3　明治・大正　年12月21日　　（130号）

（封筒表）　青山胤通殿　親披　西園寺公望

（封筒裏）〆

拝啓，無申訳御無音仕候処如何御起居候哉，小生御蔭にて其後順快，如今ハ大磯ニ烟波釣徒と相成候，御一笑被下度候，是非参堂御礼も申述度候得共，実ハ何れえも欠敬いたし居候事故他日ニ譲候，右鳥渡御伺迄如此候，烟草少々呈し度御叱留

被下度候，書不尽ニて，草々頓首

十二月二十一日　西園寺公望

青山様　梧右

［27］佐藤三吉の書簡

佐藤三吉は明治・大正期の外科医．安政4年美濃国にて生まれる．明治15年東大医学部卒業．20年より大正10年迄帝大医科大学外科教授．東京帝大医科大学学長・侍医を勤める．昭和18年没．享年87．（1857–1943）

1　明治（38）年4月26日　（87号）

（封筒表）via America

Herrn Prof. T. Aoyama　Tokio Japan

日本東京本郷区弓町　医学博士　青山胤通殿

（消印　BERLIN □□）

（封筒裏）（消印　TOKIO 30 MAY □□ 05 JAPAN）

追テ丹波君[1]ト同行ニ御坐候

益々御清康奉賀候，陳は小生事来ル五月十日ゲヌヤ[2]港ヨリ独乙船ダルムスタット号上船帰朝ノ途ニ上リ可申，途中長崎ヨリ上陸，福岡・岡山等ヲ経テ，七月上旬ニハ入京ノ積リニ御坐候間御案内申上候，尚ホ総長ニ御会（ノ）節予メ御通し置被下度奉願候，拝具

四月廿六日　佐藤三吉

青山学兄

（1）丹波君　丹波敬三の事か．明治11年東大医学部製薬学科卒業．東大教授．37年9月欧米出張．

（2）ゲヌヤ　イタリア ジェノバ（Genova）の事か．当地はフランス マルセーユと並んで東洋向けの出港地．

（注）本書簡は明治37年7月より38年7月迄欧州派遣時のものと思われる．

［28］澤柳政太郎の書簡

澤柳政太郎は明治・大正期の文部官僚・教育者．慶応元年信濃松本藩士家の長男として生まれる．帝大文科大学哲学科卒業．文部次官を経て明治44年東北帝大初代総長．大正2年京都帝大総長となり大学改革を行うも失敗（澤柳事件）．昭和2年没．享年63．（1865–1927）

1　明治45年4月4日　（116号）

（封筒表）東京本郷区弓町　青山胤通殿　親展

（消印　45・4・5・0-10）

（封筒裏）〆　東北帝国大学　澤柳政太郎

（東北帝国大学の印）

拝啓，「医育と大学」難有接手，早速一読仕候，二ニ教授の意見ハ一々同感と申す外無之候，我国にも何卒速ニ此意見の実現されんことを希望仕候，尚一二小子の特ニ感し候点を御参考迄申上度候，三頁「独乙学生の自由」と題する数行甚た羨ましく存候，日本にてハ余りに専門的ニ偏し候嫌有之かと存候，曽て聞きし所に依れは我医科大学の編制は最初御雇教師か彼の軍医学校の組織を範として創めたるものとか，今日ハ全然彼の大学を参考として改造すべきにあらずやと存候，御高見如何，我医科学生ハ（四頁）物理学・化学・動植物学等の知識に於て彼に劣るなきか，少しく疑はしく候，此点ニ関する御高見如何，一クリニックに対する病床，少くも百二十乃至百五十を要すべしとは尤かと存候，如何にして我大学の実験用の病床を増加すべきか，富める彼に於ても済生的病院に待つとすれば，我に於ては尚更此種の方法を講する必要有之と存候，済生会の病院の如き大学又は医学校と密接関係を有せしむへきものと存候，御尽力奉切望候，十五頁に医学生の増加は偉大なる科学的進歩を示す，医学の如き興味多き学問には活躍せる青年の精神自ら引キ附けらる」云々と有之，我国に於てもかくありたきもの，かくあらば小生は大賛成を表し可申，曽て御不興を蒙りし小生の言は報酬多き職業に青年か向ふを云々せし次第に候，一八頁クリニツク教授の盛ニ私人診察を為すを非とし，されはとて絶待（ママ）に之を禁せんとするを極端とせるは誠に穏当中正の診と存候，同頁ニクリニツク教授か各専門の良助手を要する診は洵ニ科学的理想的と存候，速に我医院にも実行せられたきものと存候，先ハ右迄，草々頓首

四日　澤柳政太郎

青山博士殿

二三日眼科学界の総会有之，盛況ニ有之候，今後他の医学会も開かれたく希望候

［29］品川弥二郎の書簡

品川弥二郎は幕末・明治期の政治家．天保14年長州藩の足軽 品川家に生まれる．松下村塾に学び，幕末国事に活躍．明治3年ドイツ・イギリス視察留学後内務・農商務・宮内各省の要職歴任．18年より20年駐独公使．24年内務大臣就任後，次官白根専一と共に強烈な選挙干渉を行い引責辞任．子爵．33年2月26日没．享年58．（1843–1900）

妻 静子は勝津兼亮の長女．嘉永2年生まれ．明治32年8月2日没．享年51．（1849–1899）

1　明治20年10月12日　（43号）

九月中ニハ御帰朝[1]との事伝承，如何哉と御按じ申上候処，本月八日之尊書唯今拝読，御壮健ニて御帰国之段奉万賀候，昨年の頃日より別林府ニてハ実ニ非常の御厄害（ママ）ニ相成，やじ等帰朝後も御無音勝チニて打過し候段不悪御海恕可被下候，当春やじ帰朝後引続き入浴地其他旅行のみ，昨年の冬ニ比スレバ大ニ快く相成候間幸ニ御放念可被下候，全ク洗胃の効と公使館え日々御足労被下候事ハ忘却不仕候

〇荊婦ハ八月廿九日より烈しき痛ミヲ生し廿日余も下血致し其後日々午後ニナルト発痛実ニ困難，今之処五六日前より少しくは快く相覚へ候得ども，今以午後ニハ皮下注射致し申候，四十余日臥褥の侭ニて［尤両便丈ケハ今日ニても／壁伝ひニて独行仕候］本人も御付添の従三位様もヨハリ申候，御診察ニて少しく快く相成次第神戸ニ連レ出テ度存候得ども今日の容体ニては当分動く事六ケ敷と存候，坐シテ居る事叶はぬ故臥しタル侭なり，やじハ萩え墓参の覚悟ニて西下候処右之仕合故今日迄滞京仕候，今月末か来月ニも相成候得バ萩へ帰り亡母の十三回忌ヲ営ミ度存候，東京へも一寸帰り度候得ども養生ノ為メニハ神戸辺ニテ静静カナル清涼の空気中ニ起居セルガ第一の様ニ相考候間，可相成事ナレバ春の頃迄関西ニて暮らシ度ものと存候故，イツ帰京と申事難く申上候，此段不悪御推恕可被下候，御帰朝当分釈迦の前之説法ナガラ御愛養も殊ニ奉存候，頓首

十月十二日　　やじ　拝

青山国手　坐右

三宅[2]・三浦[3]・中沢の諸彦え可然御出会も候ハヽよろしく御伝へ奉頼候，荊婦よりよろしく申上くれとの事ニ候

（1）青山胤通は明治16年より20年8月までドイツ留学する．

（2）三宅秀　この時帝国大学医科大学学長．

（3）三浦守治　この時帝国大学医科大学病理学教授．

2　明治27年8月31日　（51号）

（封筒表）東京神田区裏猿楽町　青山胤通様　親展

（封筒裏）封　箱根塔之澤福住楼滞在　品川弥二郎

箱根御養生御出張は如何哉，御勧メ申上候，注射之御苦労ハ必らす掛け不申候

万死中一生を得目出度御帰朝[1]，公私の為メニ敬賀ニ堪へ不申候，御病後之御愛護乍此上奉祈候，一言之御悦申上度，草頓首

八月卅一日　　やじ拝

青山国手　侍曹

荊婦よりもよろしく申上呉との事，コレも例の病今以全快せす，過る十五日より当地ニ来り先年の如く夢現ニテ二周（ママ）間を過し申候，看護夫やじも閉口セリ，御笑察々々，乍併痛ミハ五六日間無之故仕合申候，唯々十中八九迄ハ虚語ヲ吐キ少しも目離し出来不申，やじも明日ハ山縣出陣之見送り之為メ一寸帰京之積りニ有之候，何も御用心々々

（1）帰朝　青山胤通は香港のペスト流行により研究の為，明治27年6月出張し同年8月31日帰国する．香港滞在中ペストに罹患し九死に一生を得る．

3　明治28年9月27日　（44号）

明後廿九日午後五時支那料理注文致し置候間，御繰合セ御来駕奉願候，河本[1]・相磯[2]・平田[3]

の外来客なし，ドウゾ御来光奉願上候，戦勝後の支な料理ハ一層甘きもの哉と存候，かしく

九月廿七日　やじ

青山様

（1）河本重次郎　この時帝国大学医科大学眼科教授.

（2）相磯慥（あいそまこと）　明治15年東大医学部卒業．21年より大正13年迄侍医を勤める.

（3）平田東介（助）　嘉永2年米沢藩士伊東昇迪の次男として生まれる．平田亮伯の養子となる．品川弥二郎の養女達子（弥二郎の妻の妹）と結婚．農商務・内務・内大臣歴任．伯爵．大正14年4月14日没．享年77.（1849–1925）

4　明治28年11月26日　（39号）

（封筒表）　猿楽町　青山博士様　親展

（封筒裏）封　九段　品川弥二郎　やじ

御健全奉賀候，陳はソロソロ寒気ニ向ひ候ニ付御屏風も御入用候半と存候間，犬追物之図（土佐光茂[1]）龍田祭之図（狩野大蔵[2]）壱双呈上仕候間御笑納可被下候様奉願候，為其匆々頓首

明治廿八年十一月廿六日　やじ

青山博士　机下

病婦ハ続てよろしく候間幸ニ御放念可被下候，尚又此屏風ハ昔より違ツタルモノ故合セテ一双ト致し来り候ものニ付，此段御含迄申上置候

（1）土佐光茂（みつしげ）　室町後期の土佐派絵師．生没不明.

（2）狩野大蔵　狩野派絵師狩野大蔵卿英信（かのうおおくらきようてるのぶ）か.

5　明治28年12月16日　（41号）

（封筒表）　青山博士様　御直

（封筒裏）封　九段のやじ　拝

北海之本場鮭壱本おのし代リニ為見申候，屏風斗りでハ寒気御凌ぎ十分無之と存候故，誠ニ失敬之至りなれども，此火鉢御歳暮之しるしまでに差出候間，御笑留可被下候，かしく

十二月十六日　やじ

青山様

病婦別ニ異状無之候，今夕可相成ハ御来訪を願ひ度と申居候，よろしく御願申上候

6　明治（31）年4月26日　（40号）

（封筒表）　神田裏猿楽町六　青山博士殿　親展

（封筒裏）封　九段　品川弥二郎

前略，白根男[1]之難病ニ付てハ政友会非常ニ煩念し種々之議論出て終ニ理外之理ニ訴フルニ至り注射医者ト呼バル、吉松文治ト申モノ昨日梅園町ニ行きて診察候由，勿論病根は分ルモノニも無之，唯々健康保養之為メニ注射致サセ度，皆々相望ミ申候，然ルニ本人ハ老台之許可を得すてハ療治ニハカ、ラぬと申居候由ニ付，害毒ニナラヌ事は皆々確信候間，何卒御許容被下度奉願候，先ハ右御願迄，草々頓首

四月廿六日　やじ

青山博士様

（1）白根男　男爵 白根専一．明治期の内務官僚・政治家．嘉永2年12月22日長州藩士家に生まれる．慶応義塾に学び司法・内務・大蔵省勤務．愛媛県・愛知県知事・内務次官・逓信大臣を歴任．男爵．明治31年没．享年49.（1850–1898）

7　明治31年5月27二七日　（58号）

（封筒表）　青山様　親展　やじ

（封筒裏）封　九段　やじ

当病婦ハ先ツ替り候事もなし，昨夜深更ハ注射，今早天も注射セリ

行違ひ拝話を得す候処，白根男は日々悪兆ヲ顕生し候様ニ伝承仕候，入院致サセズテハ到底只今之処ニては致し方無之哉と存候，然ルニ婦人室ニ空気流通之よき処有之哉ニ伝承ス，コレハ御心配被下候訳ニハ参らぬモノニ候や如何，御工夫置被成下度奉願候，入院云々も同家より申来り候訳ニハ無之候得共只今之処ニテ治療不十分と存候，如何之御意見哉承り置度候，為其草々頓首

五月廿七日　やじ

青山　様

8　明治31年12月25日　（55号）

（封筒表）　青山博士様　親展

（封筒裏）封　やじ

此額面ハベルリンニテ装飾サシテ持帰りし銅刻師の有名なる「マンデル」翁[1]之作ナリ，日本ニテハ石板同様ニ見ナサレ，少しも普通人ニハ価値ナキもの，甚た失敬なれども三十一年の歳暮の験まてニ差出候間，御壁にかけ被下候得ハ大幸ナリ，為其草々頓首

三十一年十二月廿五日　やじ

青山博士様

病人変りなし，昨夜と一昨夜ハ十二字後注射なし，ドウゾ続ケカシト神かけていのり申候

（1）マンデル　カール フオン マンデル．フランドル生まれのドイツ人．エッチング師・画家・詩人．（1548–1606）

9　明治　年10月29日　（42号）

一昨日ハ病気快復と楽しみ居候処，御帰り後間もなく元トの杢庵ニ帰し，引続き今朝まで少しも快復之兆なく候，此段為念御報申上置候，アー

十月廿九日　やじ

青山様

10　明治　年6月21日　（45号）

御清適候半と奉賀候，十七日之午後病人を連れて三ヶ年振りニ代々木の松林中ニ帰り候処，格別よろしきと申訳ハ無之候得とも，兎ニ角今日まて毎日一回山崎生の来訪のみにて夜も相応ニよく寝入り候間先ツ御安神可被下候，右御報告申上置度迄，草々頓首

六月廿一日　やじ

青山様

11　明治　年3月23日　（46号）

御健全御勉務候半奉賀候，サテ今日更メテ御願申上度ハ静岡県人ニテ笹間洗耳[1]と申仁，積年之知己ニテ親しく交際致し居候処，昨年来之病ニテ森永[2]侍医并日本橋病院長岡本などハ同人之旧知ニテ有之，懇切ニ注意も致しモライ居候得共イヨイヨコレと申病症ヲ見出す事ニ至らす，本人非常之困難ヲ時々感し居候ニ付，何卒一時間之時ヲ御與へ被下候て今日マテ之経過篤と御聞取之上御診断被成下度奉願候，此男ハ維新前有名ナル斎藤篤信斎先生[3]之門生ニテ幼年之節より傑出セシ偉人ナリ，普通之静岡人と異り候間，特別之御診察被成下度奉願候，同人経歴談ニ付てハ筆頭之尽す処ニ無之候，先ハ右御願迄，草々頓首

三月廿五日　やじ

青山博士閣下

（1）笹間洗耳　静岡県庁建設関係職員．咸臨丸殉難の碑建設等に従事する．

（2）森永友健　明治14年東大医学部卒業．28年より侍医局主事．

（3）斎藤篤信斎先生　斎藤弥九郎．江戸時代の剣術家．寛政10年越中国に生まれる．江戸で道場練兵館を開き薩摩や長州の桂小五郎・高杉晋作・品川弥次郎等の剣術指導をした．明治4年没．享年74．（1798–1871）

（品川弥二郎の書簡は次号へ続く）

［主要参考文献］

朝日新聞社編『朝日日本歴史人物事典」』朝日新聞社　1994年11月30日発行

鵜崎熊吉編『青山胤通』青山内科同窓会　1930年5月8日発行

泉孝英編『日本近現代医学人名事典 1868–2011』医学書院　2012年12月5日発行

『会員氏名録』東京大学医学部鉄門倶楽部　2001年発行